委任統治期南洋群島における内地観光団（1931-1933年）

千住　一

はじめに

本稿の目的は、1922年4月から日本の委任統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」（以下、観光団）のなかでも、1931年から1933年にかけて組織された3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある[1]。観光団とは、南洋群島の旧来からの住民（以下、住民）を参加者として、数週間にわたって日本内地に滞在し、各地を経巡ってから南洋群島へ帰還するというものであり、現時点で、1920年を除く1915年から1939年までのあいだ、年1回実施され続けたことが確認されている[2]。

すでに筆者は別稿で、軍政期に実施された計6回の観光団に関する詳細のほか[3]、委任統治期に組織された観光団のなかでも、1922年から1930年にかけて実施された9回の観光団の行程および参加者の詳細を明らかにしてきた[4]。以下、1931年に実施された委任統治期における10回目の観光団、1932年に実施された第11回観光団、1933年に実施された第12回観光団の行程および参加者について整理する。

Ⅰ　第10回内地観光団（1931年）

1．行　程

(1)　内地における行程

1931年に実施された第10回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道、防衛省防衛研究所所蔵の史料、南洋協会発行の雑誌『南洋協会雑誌』への掲載記事[5]、恩賜財団奨学会発行の雑誌『日の光』に掲載された観光団参加者3名による手記「第十回観光団日誌」（以下、第10回日誌）が挙げられる[6]。以下、これらの史料にもとづいて第10回観光団の内地における行程を再構成したい。

まず、防衛省防衛研究所に所蔵されている「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」という文書を取り上げる[7]。後述するように観光団は6月26日に内地へ到着するが、この文書は、それに先立つ6月22日付けで拓務省から陸軍省に向けて発信されたものである。来る6月29日午前中に「近衛歩兵連隊」を観光団に見学させたいというのが文書の主旨であるが、そこには以下のような記述が見られる。

> 今般南洋庁ニ於テ管内島民啓発ノ為ポナペ、トラツク及パラオ支庁管内島民有力者約二十名（引率者三名）ヲ以テ内地観光団ヲ組織シ別紙予定日程表ノ通観光致スコトト相成候

【表1】は、ここで「別紙予定日程表」とされているものであり[8]、それによると、観光団は6月26日から7月14日までの計19日間内地に滞在し、横浜、東京、京都、大阪、宝塚、横須賀を経て、横浜から南洋群島に向けて出発する予定となっている。

また、拓務省による「近衛歩兵連隊」観覧の願い出に対しては、6月26日付けで陸軍省より承諾の回答が発せられており[9]、これら一連のやりとりから、内地における観光団の訪問先は、拓務省が事前に関係各所と調整しながら決定していたと考えられる。

次いで【表2】であるが、これは、第10回日誌および『南洋協会雑誌』の内容にもとづいて再構成した、第10回観光団の内地における実際の行動内容や訪問先である。それによると一行は、6月26日に横浜へ到着した後、東京、京都、大阪、宝塚、横須賀を訪れ、7月15日に横浜から南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、内地には20日間滞在している。以下、第10回日誌の記述にもとづき、新聞報道や『南洋協会雑誌』による補足を加えながら、【表2】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい。

6月26日[10]、日本郵船の春日丸で「ナガクアコガレテイタ」横浜に入港した一行は、検疫を経て、12時に「三号波止場」へ上陸するが、その時の様子は、次のように書き留められている。

> 大キナ船ヤ大キナ建物ヤ立派ナ家ヤ見タコトノナイ大キナ機械ヤ大ゼイノ人タチガ、ドンドン働イテ居ル様子ハ、何トモイハレナイ程、ホントウニ文明ノ国ニ（ママ）オドロキマシタ

横浜到着後、「吉本」と「橋本」という人物が観光団を出迎えたとあり[11]、一行はふたりに引率されて桜木町まで歩く。そこから汽車で東京駅へ向かい、東京駅からは自動車で宿舎の「繁星館」まで赴き、15時に繁星館へ到着する。到着後は宿舎にとどまっていたようであるが、「ユウハンヲタベテカラ私共ハ色々ナオ話ヲシテ、夜オソクマデ大サワギデシタ」。

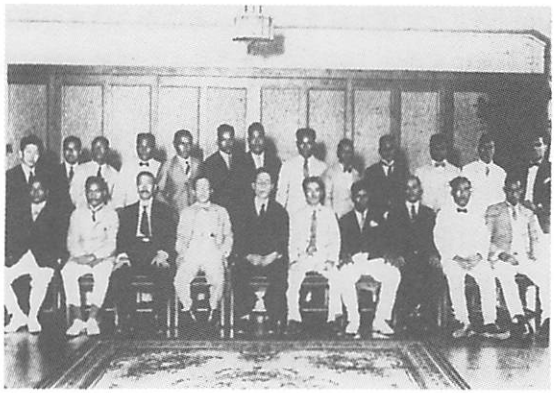
27日は[12]、8時に自動車3台が繁星館まで迎えに来て、まず宮城にて遙拝を行う。次いで「東京出張所」にて「野田」という人物と面会したとあるが[13]、過去の観光団のありようを踏まえると、「東京出張所」とは南洋庁東京出張事務所のことであると考えられる[14]。その後は、拓務省を訪れて「大臣ノオ話ヲ承リマシタ」とあることから、拓務省において当時の拓務大臣である原脩次郎と面会したことが分かるが、新聞各紙はこの時の様子を写真入りで報じている【図1】[15]。

南洋土人の市内見物

廿六日朝霧に暮いた南洋クラブ、トラック、ポナペ、帝島の土人群の一行は東京の歴史に印されて廿日間九時頃を期し、同十一時頃帝都の各部、都市美と豊富、中では丸ビルその他に名物した が廿七日五日間、同八日大阪の市電を選び、十四日東京に帰の日為で「帰京」つく、感慨であるの写真は見物面の拓務省にお拓務

図1　拓務省における第10回観光団（1931年）
出典）『報知新聞』1931年6月28日付け夕刊2面。

拓務省を辞した後は、11時に東京市役所を訪れて当時の東京市長である永田秀次郎と面会し、『東京朝日新聞』によると、一行は東京にまつわるパンフレットを多数受け取った[16]。それから丸ビルを観覧し、12時頃から南洋協会主催の昼食会に参加しているが、『南洋協会雑誌』は当日の様子について、「一行を丸の内中央亭本店に招待歓迎、午餐会を開催し尚ほ紀念撮影を為せ



（唐本亭央中内ノ丸於・日七十二月六）會迎歓觀光觀地內民島群洋南

図2　「丸ノ内中央亭本店」における第10回観光団（1931年）
出典）南洋協会1931「南洋群島民内地観光団歓迎」（『南洋協会雑誌』17(8)：口絵）。

り」と伝えるほか[17]、当該雑誌の口絵に、その際のものと思われる集合写真を掲載している【図2】。

以降は、13時に日本郵船を訪れ、エレベーターに乗って7階まであがり、そこから「大キナタテ物ノ間ヲ、電車ヤジドウ車ガ、タクサン通ツテ居」る光景を実見し、16時頃に繁星館へ戻っているが、その途中、第10回日誌の著者を含めた7名の参加者が早稲田大学と横浜専門学校による野球の試合を観戦した[18]。

28日は[19]、日曜日だったこともあり、パラオからの参加者のうち6名が、「内藤」という教会関係者の引率によって「東京市小石川区関口臺町ノ天主公教会」へ出かけた一方、「新教ノ信者ハ霊南坂ノ教会」を訪れた。第10回日誌の著者は「天主公教会」を訪問しており[20]、そこでは「内地ノクリスチヤンガ多イ事」に驚くとともに、「内地ニ居ル友達ト記念ノ写真ヲウツシマシタ」[21]。その後は「キリスト大学校」を訪れ、16時に繁星館へ一旦戻っているが、18時には、先述した南洋庁東京出張事務所の「野田」に連れられて日本青年館で活動写真を観覧し、夕食を食べてから20時頃に宿舎へ帰った。

29日は[22]、8時に繁星館を出発して、先に確認した拓務省から陸軍省への申し入れのとおり、歩兵第二連隊を訪れて「話ヲ聞カシテモラツタリ、ヘイタイノ勇マシイイクサノエンシユウヤ色々ナ機械ヲ見セテ頂キマシタ」。11時には南洋貿易株式会社を訪問し、「支店長カラコプラノ安クナツタコトナド」についての話を聞き、その後に訪れた淀橋専売局では、「タクサンノリツパナ機械ヤ大ゼイノ婦人達ノ真面目ニ勤務シテオラレル所ヲ見テ、大ヘンカンシンシマシタ」。それから明治神宮を参拝し、18時過ぎに繁星館へ戻る。

30日は[23]、8時に繁星館を出発して最初に貯金局へ向かっているが、そこでは、「貯金シタ人ノ名ヲ見セテモラツ」たとあるため、参加者のなかに南洋群島に設置された郵便局を通じて貯金を行っていた者が含まれていたと考えられる[24]。その後は自動車で日比谷公園へ向かい、松本楼で昼食を済ませてから松屋と三越で買物をしているが、「品物ヲ買ツタ人ガ沢山アリマシタノデ」、宿舎へ戻ったのは18時頃であった。

7月1日は[25]、8時半に自動車で繁星館を出発し、深川の「東京市立第二高

等女学校」を訪れ、講堂で多くの生徒と対面したほか、「沢山ゴチソウニナツテ、其ノ上オミヤゲヲ頂キマシタ」。次いで訪問した「千代田小学校」では校長と面会した後、「生徒ノ教室」を見学し、続く「東京市立第二中学校」では「生徒ノ学課ヤ運動」を見学した[26]。その後は上野精養軒で昼食をとってから動物園へ向かうが、動物園では特に「オツトセイ」と「カバ」に驚いたと記されている。

2日は[27]、9時から上野の松坂屋を訪れて買物をしたほか、コーヒーを飲んだり、エレベーターに乗って地下へ降りたりした。その後は地下鉄で浅草へ向って花屋敷や帝国館を訪れているが、浅草については、「東京デ一番ニギヤカナトコロデ、色々メヅラシイモノガアリマシタ」と書き留めている。

3日は[28]、9時に「レコード石鹸」の製造元であるという「南海商事会社」を訪れる。その後は「大日本合同油脂グリセリン会社王子工場」を訪問するが、この工場は「色々ナリンコウヲトリヨセル工場」であると説明されている。そこで昼食をとった後、13時に船で荒川から隅田川へまわって「花王石鹸工場」を訪れ、工場見学の後は「ポナペ、トラツクノ人ガオドリヲ見セテヤリマシタ」。その後は自動車で「オリエントカフエー」に行って夕食をとり、前日に続いて浅草を訪れて芝居や踊りを観覧し、22時に宿舎へ帰る。

4日は[29]、翌日に控えた京都行きの準備をしてから、10時に再び浅草へ「アソビニ行キマシタ」。浅草では、芝居の出演者と写真を撮ったり、芝居や活動写真を観覧して15時頃まで過ごしている。その後一旦宿舎に帰ってから、「パラオノエラシボンノ墓」を参った[30]。

5日は[31]、自動車で二重橋を訪れ、そこで集合写真を撮影してから東京駅へ向かう。東京駅から9時発の汽車に乗車、16時41分に京都駅へ到着し、「日吉家」に投宿しているが、この日は宿舎にとどまっていたようである。

6日は[32]、「大雨」のなか9時半に宿舎を出発、京都市役所を訪れ、市役所内を1時間ほど見学した後、自動車で「ヤオマサ」というカフェーへ向かい、そこで昼食をとる。13時からは「京都ニアルオ寺ヲ見物」し、18時に宿舎へ戻っているが、どの寺を訪れたかは不明である。なお、【表1】によると、この日は「京極夜景」が予定されていたものの、第10回日誌には関連する記述

が見られないことから、夜景見物は大雨のため中止になった可能性が高い。

7日は[33]、8時発の電車に乗って八瀬へ向かい、そこから「登山ケーブル」で四明ヶ嶽へ行き、さらに「空中ケーブル」に乗って「京都中ヲ一目ニ眺メ」たとあることから、比叡山を訪れたことが分かる。その後、13時には下山して「八瀬ノ遊園地」にある食堂で昼食をとり、電車で「京都ノ大学病院」へ向かっている。そこには、かつてパラオにいたという「高崎院長」なる人物がおり[34]、一行を案内しているが、病院では「レントゲン」に一番感心したと書き残されている。病院見学後は一旦宿舎に戻り、夜は活動写真を観覧しに出かけた。

8日は[35]、8時に自動車で宿舎を出発して「伏見ノイナリサマヲ参拝」した後、13時から30分ほど本願寺に滞在している。物産陳列所見学後、一行は14時過ぎに京都駅から大阪へ向けて出発し、16時頃大阪に到着した後は「金龍館」へ投宿、夜は文楽座に出かけている。

9日は[36]、8時に宿舎を出発して造幣局を訪問しているが、「オ金ガ雨ノ様ニ機械カラ出ルノガ大ヘンフシギデシタ」と記されていることから、貨幣鋳造の様子を実見したと考えられる。その後は桜宮橋を通って大阪城を訪れ、「司令部ノ和田陸軍中佐」の案内で、司令部内を見学したり、伝書鳩の使い方を教わったりしている[37]。昼食は「公会堂」でとり、14時に訪れた「日本アルミニユーム製造所」では工場を見学し、16時に訪れた大阪毎日新聞社では写真撮影を行ったり、「南洋」に関する活動写真を観覧したりしている[38]。17時に訪れた大阪朝日新聞社では「新聞ヲ造ル機械」を実見し、宿舎には18時頃戻った。

10日は[39]、8時に自動車で宿舎を出発して各工場を訪れ、「鐘淵紡績会社」では織物工場を、「島田硝子製造所」ではガラスの製造過程をそれぞれ見学している。午後は道頓堀の劇場「角座」にて芝居を観覧するが、その際の感想は、「アマリ面白イコトハアリマセンデシタガ、カンシンスル所ハ沢山ゴザイマシタ」と書き留められている。

11日は[40]、電車で宝塚へ向かう。そこでは、「若イ日本ノ、キレイナムスメタチガ、キレイナキモノヲキテ、ウツクシイ声デ、ウタツタリオドツタリ」

する芝居、すなわち宝塚歌劇団のレビューを観覧している。夕食後、参加者の一部は宿舎へ帰ったが、第10回日誌の著者を含めた8名は、宝塚に居残って活動写真を観覧してから、22時の電車で宿舎へ戻った。

12日は[41]、横浜へ向かう準備をしてから宿舎を出発し、大阪駅から汽車に乗る。横浜には夕方到着し、「紀ノ国屋」へ投宿する。この日は宿舎にとどまっていたようで、「バンノゴ飯ヲタベテカラ、ミンナハ今日ノツカレデ、早クネテシマイマシタ」。

13日は[42]、「横浜デ朝カラ晩マデ町ノ見物ヲシマシタ」とあるのみで、その詳細については不明である。

14日は[43]、横須賀で海軍工廠や飛行場を見学したとあるので、横須賀鎮守府を訪問したことが分かる。海軍工廠では軍艦や機械、飛行場では飛行機を実見したというが、「今日ハ雨ガ降ツテ居ルノデ、飛行機ハ飛ビマセンデシタ」。なお、横須賀から横浜までは汽車で移動している。

15日は[44]、6時に起床して荷造りをし、10時に買物へ出かけているが、「アマリ皆ガ色々ナ物ヲ買ツテ、方方(ママ)歩イタノデ、大ヘン時間ガカカリマシタ」。その後、13時半に宿舎で昼食をとり、15時に乗船、16時に南洋群島へ向けて横浜を出港する。港には、「友達ヤオ世話ニナツタ人タチ」が見送りに来ていたとあるが、その詳細については不明である。

以上が、主に第10回日誌にもとづいて再構成した第10回観光団の内地における行動の詳細である。ここで、【表1】と【表2】の差異を確認しておくと、予定では19日間であった内地滞在が、実際には20日間となっている。訪問先については、多少の前後や細かな齟齬が看取されるものの、17日目の7月12日まではほぼ予定どおりの行程を辿っている。13日に実施された横浜市中見物は【表1】に記されていないが、これは、利用予定の船が何らかの理由で14日に出港できなくなったために急遽挿入された、日程調整的な行動であったと考えるのが妥当であろう[45]。

(2) 内地着発前後の行程

第10回日誌には、内地滞在中のみならず内地着発前後の記述も含まれているため、ここではそれらの内容について確認したい。第10回日誌は、6月19日の7時半にアンガウルへ上陸するところから記述が始まる。19日は[46]、トラック支庁長とポナペ支庁の「渡邊」という人物に引率されて採鉱所を見学し[47]、11時にアンガウルを出港する。その後、15時頃にパラオへ入港したものの、時間の関係から上陸は行われなかった。

20日は[48]、6時起床、7時朝食、9時半に「本庁」へ向かったとあるが、「本庁」とはパラオに設置されていた南洋庁のことであろう。11時からは「長官カラ御話ヲ頂キ」、第10回日誌の著者が「一同ニ代ツテオレイヲ申シアゲマシタ」とあるため、当時の南洋庁長官である横田郷助と面会したことが分かる。昼食後は長官邸、電信所、村の様子などを実見する予定だったものの、雨のため取り止めとなった。一行は13時に乗船し、15時にパラオを出港しているが、船内では、「私共ノオ小使（ママ）銭ヲ三谷サン［観光団の引率者：引用者注］ニ預ツテイタダキマシタ」とあることから、観光団参加者はいくらかの現金を内地に持参していたと考えられる。また、船内では、「長イ船旅ノ事ヤ、話ニノミキクアコガレノ内地ノ事ナド」について話し合ったという。

21日から25日は[49]、船内での様子が描かれているものの特筆する事項は見受けられない。前述のとおり、一行は26日に横浜に入港するが、入港前は、船から大島や「ボウシユウ」が見え、「皆ハウレシソウナ顔ヲシテ、何トナクオチツカナイ様子」だったとあるほか、横須賀付近の上空に2機の飛行機が見られたことが書き留められている[50]。

以上の記述より、後に見るようにトラック、ポナペ、パラオの各支庁内に居住する参加者によって構成された観光団は、まず、トラックおよびポナペ支庁からの参加者がアンガウルを経てパラオに到着、次いでパラオにてパラオ支庁からの参加者が合流し、全参加者がパラオから内地へ向かったことが分かる[51]。

一方、内地出発後の様子であるが、7月16日から18日[52]、20日から21日は[53]、船内での様子が綴られているものの特筆する事項は見受けられない。

19日は[54]、日曜日ということもあり、昼前に「皆ガ集ツテ日曜日ノオ祈」をし、夜は「金森先生ト一シヨニ讃美歌ノレンシユウ」をしたとあるが、この「金森」という人物の詳細は不明である。

22日は[55]、5時に起床して荷造りを行い、8時の検疫後、パラオに上陸する。一行は、「塚原」と「安井」という人物に引率されて9時に「本庁」すなわち南洋庁へ到着[56]、11時から「長官カクカノ御クンジガゴザイマシテ、私ハ一同ニ代ツテオレイヲ申上ゲマシタ」とあることから、往路と同様、南洋庁にて長官の横田郷助と面会したことが分かる。その後、昼食をとり、13時からパラオを見物して夕方に解散した、という記述をもって第10回日誌は終わっているが、トラックおよびポナペからの参加者はそこからそれぞれの居住地へ戻って行ったと考えられる。

2．参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように[57]、南洋庁発行の統計資料には、第10回観光団の参加人数が18名で、その内訳はパラオ支庁内の住民9名、トラック支庁内の住民4名、ポナペ支庁内の住民5名であることが記されており[58]、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に参加者の属性を確認すると、新聞各紙は以下のような報道を行っている。「パラオ、トラツク、ポナペ各島の有力者」[59]、「ポナペ島の島民伝道師」、「パラオ島、トラツク島、ポナペ島等の自然生の椰子樹林を経営してゐる農民が多く」[60]、「パラオ、トラツク、ポナペ諸島の地主がおも」、「トラツク島の酋長の御曹司」、「ポナペ島に住む新教の牧師さん」[61]。そうしたなか、『国民新聞』はより詳細な報道を行っており、「南洋の珍客来る／日本語を話す土人観光団」という見出しの下、「農十三名、雑貨商一名、支庁給仕一名、巡査一名、伝道師一名、大工一名で何れも公学校教育を受けたので日本語も頗る達者」と報じている[62]。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、「渡邊」と「三谷」の名前が第10回日誌および新聞各紙に頻出する[63]。

Ⅱ　第11回内地観光団（1932年）

1．行　程

(1)　内地における行程

1932年に実施された第11回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道、『南洋協会雑誌』への掲載記事、『日の光』に掲載された観光団参加者4名による手記「第十一回観光団日誌」（以下、第11回日誌）が挙げられる[64]。以下、これらの史料にもとづいて第11回観光団の内地における行程を再構成したい。

まず【表3】であるが、これは、第11回日誌、『南洋協会雑誌』、新聞報道の内容にもとづいて再構成した、第11回観光団の内地における実際の行動内容や訪問先である。それによると一行は、7月9日に横浜へ到着した後、東京、京都、大阪、宝塚、横須賀を訪れ、7月31日に横浜から南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、内地には23日間滞在している。以下、第11回日誌の記述にもとづき、新聞報道や『南洋協会雑誌』による補足を加えながら、【表3】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい。

7月9日[65]、観光団一行は、日本郵船の山城丸で11時に横浜へ入港する。横浜には、南洋庁東京出張事務所から「杉島」と「吉本」という人物が迎えに来ていたほか[66]、新聞記者の姿も見えた[67]。その後は徒歩で桜木町駅まで向かい、そこから省線電車に乗り、12時に東京駅へ到着する。東京駅到着後は自動車で宮城前まで行き、「一同しせいを正してようはい」を行った後、二重橋前で記念写真を撮影している。それから自動車で宿舎の「繁星館」へ向かい、宿舎内で医師による健康診断を受けた。

10日は[68]、休養日となっており、「ちかいところをさんぽ」したり、日曜日であったことから教会を訪れたりした。『都新聞』によると、参加者が訪れた教会とは「小石川関口町の天主公教会」であって、「聖堂に集まつて讃美歌を歌ひ礼拝を捧げた」後は、日本橋三越や銀座を訪れている[69]。

11日は[70]、先述した南洋庁東京出張事務所の「杉島」が8時に宿舎まで

やって来て、電車で虎ノ門まで向かう。そこから警視庁、司法省、海軍省の前を通って南洋庁東京出張事務所と拓務省を訪れ、日比谷公園を見学した後は、拓務大臣官邸で当時の拓務大臣である永井柳太郎と、東京市役所で当時の東京市長である永田秀次とそれぞれ面会した。その後は日本郵船と南洋協会を訪れたとあるが、『南洋協会雑誌』は当日の様子について、一行を丸ビル精養軒に招待して15時から茶菓の饗応と記念撮影を行ったと伝えるとともに[71]、当該雑誌の口絵に、その際のものと思われる集合写真を掲載している【図3】。それから自動車で帰路に就き、17時に繁星館へ戻る。

図3　「丸ビル屋上精養軒」における第11回観光団（1932年）

出典）南洋協会1932「南洋群島民観光団歓迎茶話会開催」（『南洋協会雑誌』18(8)：口絵）。

12日は[72]、前日同様「杉島」が同行して8時に宿舎を出発する。靖国神社を参拝した後【図4】、近衛歩兵第二連隊の演習を見学しているが、その際の様子は、「じゅうけんじゅつを見た時は、おそろしいほどで、みんなが日本のへいたいさんのいさましく、えらいことをほめました」と書き留められている。その後は自動車で「たいしようかく」へ行き、「南洋ぼうえき会社のごちそうになりました」、「じゆうやくかたから、［中略：引用者注］ゆうえきなお

話がありました」などとあることから、南洋貿易株式会社が主催し、南洋貿易の関係者も同席した会食が行われたと考えられる。それから一行は、自動車で淀橋の専売局を訪れて煙草の製造過程を実見しているが、第11回日誌の著者はそこでの従業員の働きぶりに触れ、自分たちが「のんきにくらしていることをはずかしくおもえ（ママ）ました」と書き残している。宿舎で夕食をとった後は、自動車で新宿の帝都座を訪れて「日本の女の、だんす」を観覧し、23時に繁星館へ戻る。

南洋の珍いお客様
靖國神社參拜

図4　靖国神社における第11回観光団（1932年）
出典）『二六新聞』1932年7月13日付け夕刊2面。

13日は[73]、8時半に宿舎を出発、自動車で泰明小学校を訪れて授業参観や校内見学を行っているが、第11回日誌の著者は校内の清潔さについて触れ、「南洋の公学校にくらべると、大へんなちがひです」と書いている[74]。次いで自動車で三越へ向かい、昼食をとってから買物をする。その後は再び自動車で「やのくら」にある「ふく井ろう」を訪れ、そこで「南洋しよくさん公しのごちそうになりました」とあるが、「南洋しよくさん公し」の詳細については不明である。

14日は[75]、8時過ぎに宿舎を出発、自動車で御茶の水の高等女学校を訪れて「きよういくのどうぐのせつめい」を聞いているが、第11回日誌の著者は、「生徒だ（ママ）ちのきりつのただしいことに、かんしん」し、「南洋にかえつた

ら。(ママ)ぜひ村の人々や、学校の生徒だ(ママ)ちにこのお話をしたいとおもひました」と綴っている。その後は万世橋から地下鉄に乗って浅草へ赴き、花屋敷を訪れたほか、レビューや活動写真を観覧した。

15日は[76]、8時半に宿舎を出発して明治神宮を参拝した後、代々木練兵所で騎兵連隊の演習を見学する。見学後は、原宿から省線電車で東京駅まで行き、そこから白木屋が用意した自動車で白木屋へ向かう。白木屋では、「東京れんごう少年だんマリアナ会の、もよう(ママ)しで、ちゆうしよくをいただいたり、かつどうしやしんを見せてもらえ(ママ)ました」とあるが、その詳細については不明である。その後は、「東京でんとうビルデ(ママ)ング」にて南洋興発株式会社の招待で「ごちそうをうけました」とあることから、南洋興発主催の会食が行われたと考えられる[77]。宿舎へは19時に戻っている。

16日は[78]、8時に宿舎を出て、自動車で滝野川の農事試験場、王子の大日本人造肥料製造会社、合同油脂グリセリン製造会社を立て続けに見て回っているが、合同油脂グリセリン製造会社では工場が休みだったため、「石けんせいぞうの、もようをくわしくききました」。大日本人造肥料製造会社で昼食をとった後は、自動車で白木屋へ行き、前日に引き続き「東京れんごう少年だんのしようだ(ママ)い会」でレビューを観覧して、17時に宿舎へ帰る。

17日は[79]、「休養日」とのことで「みんなすきなことをして、あそびました」とあるが、午後は、自動車で明治神宮外苑を訪れている。

18日は[80]、8時に宿舎を出て、自動車で上野の第二市立中学校を訪れ、校内のほか生徒たちによる体操や柔道、剣術などを参観する。その後は、上野動物園、上野公園、松坂屋を訪れ、松坂屋で買物をしてから、自動車で宿舎へ戻る。夕食後は自動車で銀座へ向かって「夜景」を見物しているが、「大へんな人で、おされて、もまれて、身うごきができないほどでした」。

19日は[81]、8時に宿舎を出て、自動車で蒲田の「とも田」養鶏場、川崎の東京製網会社、東京電気会社、マツダ照明学校を訪問し、東京製網では「ワイヤーロープ」や「マニラロープ」の製造過程を、マツダ照明学校では電球の製造過程をそれぞれ実見する。その後は明治製菓を訪れ、チョコレート、キャラメル、ドロップ、ビスケットなどの製造過程を見学し、17時に自動車

で宿舎へ戻った。

20日は[82]、9時に宿舎を出発、自動車で貯金局を訪れて係員から「ちよきんの大切なことなどくわしくせつめい」を受ける。その後は自動車で「あたご山のラジオほうそうきよく」へ行き、電気室や放送室などを実見した。昼食後は宿舎に戻っているが、翌日京都へ向けて出発するため、第11回日誌の著者と思われる「プリス、ビスマーク（ママ）、ヨハニトウスタラン（ママ）」が南洋庁東京出張事務所を訪問し、「観光団員を代表して」、「色々御世話になりました御礼を申上げました」。

21日は[83]、8時に東京駅へ到着する。東京駅には、「これまで毎日東京の案内をして下さつた」という「杉島」のほか、「野田」[84]、「吉本」、南洋興発関係者、南洋協会関係者、繁星館の女将などが見送りに来ていた。一行は、9時発の「特別急行つばめ号」で西へ向かうものの、「途中名高い富士山を見たいと待つていましたが、きりにおう（ママ）われて見えなかつたので、まことにざんねんでした」。一行を乗せた「特別急行つばめ号」は16時41分に京都駅へ到着、京都駅では京都市役所の「森田」と元パラオ病院長の「高崎」が一行を出迎えた[85]。それから電車で宿舎たる「日吉家旅館」へ向かい、宿舎では高崎による健康診断を受診している。

22日は[86]、京都市役所の「森田」と「平塚」に引率されて、9時に京都市役所を訪れる。以降は「高崎」も同行して、市内電車と叡山電車を乗り継いで八瀬まで行き、遊園地を見物した後は、ケーブルカーに乗って四明ヶ嶽へ至る。さらにそこから「空中ケーブル」を利用しているが、ある参加者は空中ケーブルに乗りながら次のようなことばを発したという。

> 文明とゆ（ママ）うものは、かんしんなものだ、電車は土の下も通う（ママ）れば、そらの中も通う（ママ）る、いま私だ（ママ）ちは、丁度ひこうきに乗つているようなものだ

空中ケーブルの後は延暦寺を訪れ、さらにケーブルカーで坂本まで行き、そこで日吉神社に参拝してから、「つるき」で「めいぶつのそば」を食す。その後、15時に一旦宿舎へ戻っているが、夕食後は再び「平塚」に引率されて

四条大橋、丸山公園周辺を散歩、「京都の一番にぎやかな、京ごくの夜景を見物」し、「森永キヤンデーストーア」で「アイススイカ」を食べてから宿舎へ帰る。

23日は[87]、「前日と同じ人に案内されて」、8時半頃の電車に乗って東本願寺を訪れる。その後は京都御所を訪問しているが、「あまりにこうこうしいので、しぜんとあたまがさがりました」。それから、四条の「やお正」で京都市役所招待による昼食会に出席し、市内見物をした後、17時頃に宿舎へ戻っている。

24日は[88]、「平塚」の案内で8時半から祇園祭へ出かける。その後は宿舎で荷造りをし、「平塚」と「森田」の見送りを受けながら13時40分に京都駅を出発、15時に大阪駅へ到着すると、そのまま宿舎である「金龍館」に投宿し、この日は「みんなが、つかれているので、ゆつくりやすみました」。

25日は[89]、8時半に宿舎を出発して大阪市役所を訪れる。それから自動車で大阪城へ向かい、「外園」という陸軍少佐の案内で天守閣にのぼり、大阪市内を見渡している。公会堂では、大阪市役所の招待による昼食会があり、その後は市内を見物してから15時過ぎに宿舎へ戻る。夕食後は、「大阪名物天満天神さまの夏祭」へ出かけているが、そこでの様子は、「船にはたいまつをたくさんつけて、うたつたり、おどつたり、川一面が船でうずまり、陸上は一つぱいの人で、身うごきも出来ないほどに、にぎやかでした」と記されている。

26日は[90]、9時に宿舎を出発、大阪市役所の「的場」という人物の案内にて、自動車で造幣局を訪れる。そこで「銅貨も銀貨も金貨も、きかいの力で、水のながれ出るように造り出され」る様子を見学した後、一旦宿舎へ戻る。それから大阪朝日新聞社と大阪毎日新聞社を訪れ、大阪毎日新聞社では夕刊紙が機械で印刷され、折りたたまれる様子を実見した。

27日は[91]、9時に宿舎を出発、前日同様「的場」の案内で鐘淵紡績会社を訪問して糸の製造過程についての説明を受ける。次いで訪れた「島田がらす工場」では、ガラスの製造過程を観覧したほか、「がらす器具」を購入した参加者もいた。昼食後は、自動車で「中本貝ぼたん工場」へ行き、18時頃に電

車で宿舎へ帰る。

28日は[92]、「的場」のほかに京都から来た「平塚」と「高崎」も同行して、9時発の阪急電車で宝塚を訪れている。宝塚では遊園地に行ったり、「種々の遊技をして遊んだり」したほか、昼食後に「少女かげき」すなわち宝塚歌劇団のレビューや活動写真を観覧し、宿舎へは19時頃に戻っている。

29日は[93]、午前中に荷造りをし、「高崎」、「的場」、「宿の人がた」に見送られて、13時に「特別急行つばめ号」で大阪を出発したものの、「途中楽しみにしていた富士山が、又もや雲におう（ママ）われて、うつくしいと云ふそのすがたをみることが出来ませんでしたので一同がつかりしました」。一行を乗せた「特別急行つばめ号」は20時54分に横浜に到着、そこから自動車で宿舎である「紀の国屋」へ移動する。

30日は[94]、9時に宿舎を出発し、自動車で横須賀鎮守府へ向かう。まずは追浜飛行場を訪れたものの、当日は「明治天皇様のお祭で飛行機のえんしゆうがお休みで見ることが出来なかた（ママ）」が[95]、「中島」という大尉の案内で駐機場を見物したり、飛行機のそばで記念撮影を行ったりした。昼食後は工廠や軍艦などを実見しているが、そこでの様子については、「あまり大きなもの、めずらしいもの、ふしぎなもの、いさましい人がたのはたらきなど、どうしても日誌にかきつず（ママ）ることが出来ませんから、南洋え（ママ）帰つてから、くわしくお話しようと思います」と書き留められている。その後、15時過ぎに宿舎へ戻り、「南洋え（ママ）帰るじゆんびに、とりかゝりました」。

31日は[96]、朝から荷造りを行い、東京から来たという「野田」、「杉島」、「稲浪」[97]、繁星館の女将らに見送られ、9時に山城丸へ乗船、11時に南洋群島へ向けて横浜を出港する。

(2) 内地着発前後の行程

第11回日誌には、内地滞在中のみならず内地着発前後の記述も含まれているため、ここではそれらの内容について確認したい。第11回日誌は、6月26日のパラオから記述が始まる。26日は[98]、13時にパラオ支庁内からの参加者がパラオ支庁を訪れ、支庁長と面会している[99]。

27日は[100]、南洋群島出発から帰着まで観光団一行を引率することになる「沼田」、「三谷」、「前澤」という人物の案内で[101]、13時に南洋庁を訪れる。しかしながら、当時の南洋庁長官である松田正之が内地出張で不在だったため、かわりに「庶務課長」が訓示を行い、第11回日誌の著者のひとりであると思われる「ビスマルク」が、一行を代表して「ごあいさつを申上げました」。

28日は[102]、8時半頃にパラオ支庁へ集合し、先述した「沼田」、「三谷」、「前澤」の3名に引率されて波止場へ向かい、山城丸に乗船、10時にパラオを出港する。

29日は[103]、12時にヤップへ到着、上陸後はヤップ支庁を訪れ、ヤップ支庁長から訓示を受ける[104]。その後は支庁関係者の案内で、公学校、教会、電信所、病院を見学したとあるほか、ヤップ支庁内からの参加者6名とパラオ支庁内からの参加者が合流している。合流した一行は16時半に乗船、17時半にヤップを出港する。

30日は[105]、船中で過ごしているが、引率者が「お金は大切にせぬといけません、よぶんのお金はあずかつてやる」と言ったため、「みんなまとめて、おたのみしました」とあることから、観光団参加者はいくらかの現金を内地に持参していたと考えられる。夜は茶話会が開催され、「内地へ行つてからのたのしいことなどをかたりあいました」。

7月1日も[106]、船中で過ごしている。この日は、「しせいきねんびでめでたい日」であったことから[107]、「船ではたくさん、ごちそうがありました」。

2日は[108]、7時にテニアンへ入港、9時に上陸した後、「役人」の案内で病院、郵便局、南洋貿易、南洋興発などを見物する。その後、15時にテニアンを出港し、17時にサイパン沖へ至ったものの、上陸は行われなかったようである。

3日は[109]、9時にサイパンへ上陸、4台の自動車でサイパンの中心部であるガラパンを見学してから、サイパン支庁を訪れている。その後、小学校、公学校、病院、刑務所などを見学し、再び支庁を訪れてサイパン支庁長から訓示を受ける[110]。それに対して、第11回日誌の著者のひとりであると思われる「ビスマーク」(ママ)が、「一同を代ひようして御礼のごあいさつを申し上げ」、

15時に船へ戻る。

4日は[111]、12時にサイパンを出港する。その後、5日から8日までは船中で過ごしているが[112]、特筆する事項は見受けられない。

以上の記述より、後に見るようにヤップ、パラオの両支庁内に居住する参加者によって構成された観光団は、まず、パラオ支庁からの参加者がヤップへ移動、そこでヤップ支庁からの参加者と合流し[113]、テニアン、サイパンを経て内地へ向かったことが分かる。

一方、内地出発後の様子であるが、8月1日から4日までは船中で過ごしており[114]、特筆する事項は見受けられない。

5日は[115]、8時にサイパンに入港、上陸後はサイパン支庁を訪問する。昼食後は希望者の7名が「ちつこう」とコーヒー製造工場を見学[116]、残りの参加者はサイパン市中を見物し、16時頃に船へ戻っている。

6日は[117]、希望者の13名だけがサイパンに上陸し、残りの参加者は船に残った。夜は、「観光記念鏡」と「平塚」から贈られたというビスケットを「みんなが(ママ)頂きました」とあるが、「観光記念鏡」の詳細については不明である。

7日も[118]、引き続きサイパン沖に停泊していたようであるが、「今日は、だれも上陸しませんでした」。その一方で、「明朝早く出帆するため」、船にはサイパン支庁から「羽山」、「永井」、「峠」という人物がやって来た[119]。

8日は[120]、5時にサイパンを出発して、6時過ぎにテニアンへ到着、参加者のうち7名がテニアンに上陸し、「諸所」を見学してから15時に船へ戻る。19時、ヤップに向けてテニアンを出発する。

9日は[121]、船中で過ごしており特筆する事項は見受けられず、10日は[122]、「明日はヤップ観光団員と、おわかれする」ため、夜に茶話会が開催された。

11日は[123]、7時にヤップへ入港、上陸後はヤップ支庁へ向かい、「ヤップ観光団員とおわかれしました」。パラオ支庁内からの参加者は、南洋群島に旧来から存在する共同家屋である「アバイ」を見学し[124]、ヤップ支庁長らの見送りを受けながら[125]、12時にヤップを出港する。また、出港後の船中の様子は以下のように描かれている。

観光団とゆ(ママ)うのは、只内地え(ママ)遊びに行くのではない、内地の人だ(ママ)ちのよくはたらくことや、教育の進んでいることや、何事でもきれいに、とゝのつていることや、みんなしんせつなこと、かんしんしたことを、めいめい自分の村え(ママ)帰つたら、その通りに自分の村を、よくしようではないかと、夜おそくまで、みんなとかたり合いました。

12日は[126]、14時にパラオ島へ入港し、「塚原」、「安井」、「藤田」といった人物の出迎えを受ける[127]。

13日は[128]、9時にパラオ支庁に集合し、パラオ支庁長[129]、南洋庁長官の松田正之それぞれから訓示を受けたとあり、「こゝに目出度く、かいさんいたしました」という記述をもって第11回日誌は終わる[130]。

2．参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように[131]、南洋庁発行の統計資料には、第11回観光団の参加人数が23名で、その内訳はヤップ支庁内の住民6名、パラオ支庁内の住民17名であることが記されており[132]、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に、参加者の属性を確認すると、新聞各紙は以下のような報道を行っている。「インテリ階級の新人連で村長、村助役、小学校助教員、巡警などの代表者だが日本語を話せるものは六名」[133]、「お百姓さんも居れば村助役、巡警などもあり、日本語の出来る者も五名居る」[134]、「三人の総村長（元酋長）さんも居りその他は巡警、百姓、教員、大工、給仕等」[135]。そうしたなか、『都新聞』はより詳細な報道を行っており、「巡警あり、大工あり、村長あり、凡ゆる階級を網羅して何れも瀟洒な背広服を着てパナマ帽をかぶりモダンな紳士姿である、一行中には日本語が話せるものも五、六名ゐるが何れも日本は始(ママ)めてゞある」と伝える[136]。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される[137]。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、先述した「沼田」、「三谷」、「前澤」の名前が第11回日誌および新聞各紙に頻

出する。

Ⅲ　第12回内地観光団（1933年）

1．行　程

1933年に実施された第12回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道が挙げられる(138)。以下、新聞報道にもとづいて第12回観光団の内地における行程を確認したい。

まず【表4】であるが、これは、現時点で入手できている新聞報道を用いて可能な限り再構成した、第12回観光団の内地における実際の行動内容や訪問先および予定である。それによると一行は、7月18日に横浜へ到着した後、東京、京都、大阪を訪れ、8月4日に横浜から南洋群島へ向けて出発する予定となっており、予定どおりであれば内地に18日間滞在することになる。一方で、南洋庁発行の統計資料には、第12回観光団の「内地着発ノ日ヲ除キタル内地滞在日数」が「18」となっているため(139)、実際には、予定よりも2日遅い6日に内地を出発した可能性が高い。

以下、新聞報道にもとづき、【表4】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい。

7月18日、一行を乗せた日本郵船の近江丸が、9時半に横浜へ入港する。横浜到着後、一行は「繁星館」に投宿しているが、そこで『東京朝日新聞』による取材を受ける(140)。その後は、19時半から引率者とともに銀座、赤坂を訪れているが、『東京朝日新聞』によると、赤坂では「フロリダダンスホール」にてある参加者が「凄い足なみを見せた」(141)。

19日は、正午に霞ヶ関の官邸において、当時の拓務大臣である永井柳太郎招待による昼食会が催されている。そこでは永井による訓示があり、『万朝報』によると、永井は一行に対して、「色は黒くとも、白くとも皆天の使命を負ふて生れて来る、我々は益す協力一致して南洋を中心とする新文化建設の為め努力したいものである」と述べた(142)。その後は、14時に東京市役所を訪れているが、市長不在のため(143)、助役の「落合」、市議会長の「森」と面

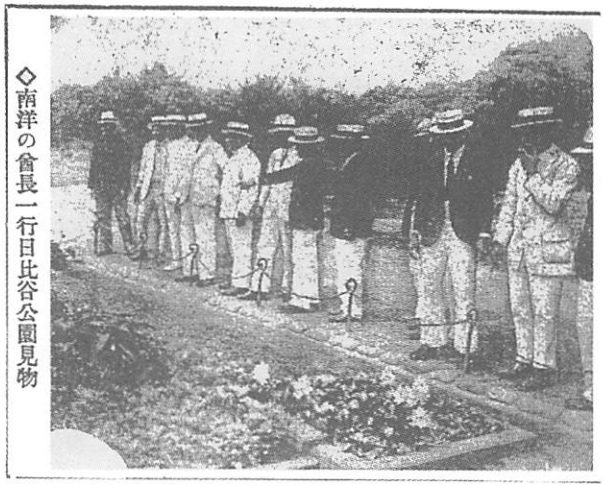


図5　日比谷公園における第12回観光団（1933年）
出典）『中央新聞』1933年7月20日付け夕刊1面。

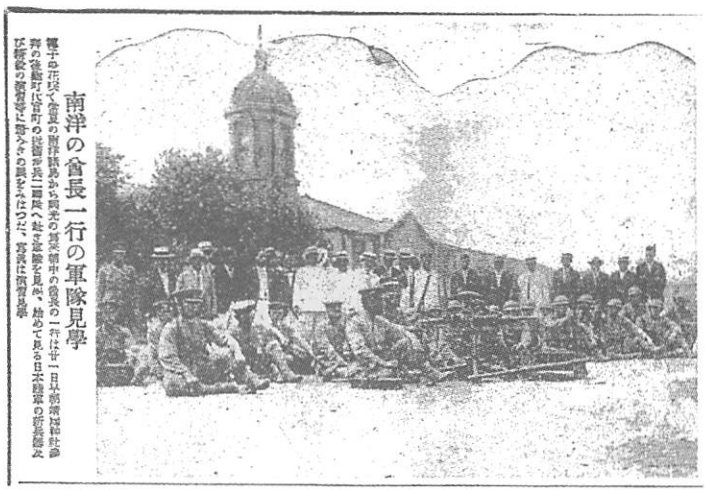


図6　近衛歩兵第二連隊における第12回観光団（1933年）
出典）『中央新聞』1933年7月22日付け夕刊1面。

会した後、東京市から「大東京の写真や案内地図等」が一行に贈られた(144)。なお、何時頃の出来事かは不明であるが、この日は日比谷公園も訪れたようである【図5】。

20日の様子については不明であるが、21日は、早朝に靖国神社参拝を済ませた後、8時に麹町代官町の近衛歩兵第二連隊を訪れた【図6】。そこでの様子は複数の新聞によって取り上げられており、例えば『国民新聞』は、「軍隊の整備した兵営、兵隊さん達の規律正しい動作や機関銃、タンクなどの精鋭の武器」を実見したと報じている(145)。

22日から25日までの様子については不明であるが、26日は、16時51分に「燕号」で京都へ到着、そのまま「日吉屋」に投宿したとあることから(146)、一行は26日の朝に東京を出発して京都へ向かったと考えられる。

27日は、各紙報道によると、京都市役所、京都市長の大森吉五郎招待による昼食会、京都御所、東本願寺という予定になっているが、現時点で実際の様子を伝える新聞報道を発掘することができていない。一方、『京都日出新聞』によると、この日の夜は「京都観光局」の案内で、「京都座」にて開演中の梅澤昇による剣劇「やくざ巡礼」および「人間安兵衛」を観覧したとあり、『京都日出新聞』の当該記事には、閉幕後に梅澤と握手する参加者の写真が掲載されている(147)。

28日は、比叡山を訪れた後、14時に松竹下加茂撮影所を訪問する。撮影所では、ちょうど「板東好太郎、飯塚敏子主演の「蝙蝠の安さん」を撮影中」であったため、その様子を実見したほか(148)、「井上久栄、北原露子、宏橋照子、桂淳子、中村歌枝」といった女優たちと記念撮影を行った(149)。その他、各新聞報道によると、この日の夜は「京極」を見物する予定となっている。

29日は、10時23分に大阪へ到着したとあるため、29日の朝に京都を出発して大阪へ向かったと考えられる。『大阪毎日新聞』は、一行が「午後本社を訪問、社内を見学」したと写真入りで伝えるほか、「来月〔8月：引用者注〕二日大阪発横浜へ向かひ同四日出帆の春日丸で帰国する」と報じている(150)。

現在発掘できている第12回観光団の内地における行動内容や訪問先に関する報道は以上であり、現時点で、全行程についての詳細を明らかにするに

至っていない。同様に、観光団の内地着発前後の行程についても不明である。

2．参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように(151)、南洋庁発行の統計資料には、第12回観光団の参加人数が19名で、その内訳はトラック支庁内の住民5名、ポナペ支庁内の住民9名、ヤルート支庁内の住民5名であることが記されており(152)、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に、参加者の属性を確認すると、新聞各紙は参加者の肩書きを「酋長」、「酋長の息子」、「青年酋長」、「村長」、「村の書記」、「青年団理事」、「助教師」、「巡警」などと伝えているほか、『都新聞』のように、「中には日本語を流暢に話す者もある」といった報道も看取される(153)。

また、一連の新聞報道を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、「片桐」、「安井」、「田代」という3名の名前が新聞各紙に頻出する(154)。

おわりに

ここまで、1931年から1933年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、各観光団の共通点および相違点に注意しながらその概要をまとめる(155)。

まず行程であるが、1931年実施の第10回観光団は20日間で横浜、東京、京都、大阪、宝塚、横須賀、横浜というルートを、1931年実施の第11回は23日間で横浜、東京、京都、大阪、宝塚、横須賀、横浜というルートをそれぞれ辿り、1932年実施の第12回は恐らく内地に20日間滞在し、少なくとも横浜、東京、京都、大阪を訪れている。

これらより、内地滞在日数については3回とも3週間前後で共通しており、移動経路については、第12回に不明な点が存在するものの、3回とも類似のルートを採用していたと言えよう。また、筆者による研究成果を踏まえるならば、これら3回の観光団において看取される内地滞在日数および移動経路は、直近の観光団のありようを踏襲したものであると判断できる。

続いて各観光団における特徴を指摘すると、第10回においては、観光団の訪問先を拓務省が事前に調整していた点や、過去に南洋群島と関係した人物が観光団に関与していた点が、第11回においては、第10回で見られた過去に南洋群島と関係した人物だけでなく、訪問先の自治体関係者が積極的に観光団と関わっていた点や、内地での見聞を南洋群島帰還後に吹聴することが参加者によってたびたび示唆されていた点がそれぞれ挙げられる。加えて、過去の観光団でも行われていた内地着発前後の「南洋群島観光」についても、これら2回の観光団において実施が確認できる。

また、3回の観光団に共通する特徴としては、要人との面会を果たしている点を指摘できよう。つまり3回とも南洋庁の監督者たる拓務大臣と面会しているほか、第12回では不在のため達成されなかったものの、第10回と第11回では東京市長との面会を行っている。同様に、第10回と第11回で認められた「南洋群島観光」では、南洋庁長官や各支庁長と面会した。

次に参加者であるが、人数に関しては18名、23名、19名という推移をたどっており、委任統治期における過去の観光団と比較して特に顕著な変動は認められない。性別については3回とも全員男性であり、この点についても過去の観光団のありようを踏襲していると言える。参加者の肩書きに関しては、第10回に農業関係者が多く含まれていた点、第11回および第12回に首長関係者や教育関係者が含まれていた点のほか、3回の観光団に巡査や日本語使用者が含まれていた点を指摘することができる。また、参加者がある程度の現金を内地に持参していた点も、3回の観光団に共通して見られた。

さて、南洋庁による南洋群島統治を監督する立場にあった拓務省は、第10回の訪問先調整を行うなかで、観光団実施の目的が「島民啓発」であることを明言していた。今後、委任統治期において実施された全観光団の詳細を段階的に明らかにすることにより、こうした観光団実施の背景や目的を一層明確にしていきたい。

謝　辞

故山口洋兒氏および辻原万規彦先生（熊本県立大学）からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された観光団全般に関わる史料の提供を受けた。ここに記して謝意を示したい。

注

(1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。また、史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略した。なお、地名に関しては、基本的に当時の南洋群島における呼称を使用した。

(2) 日本は1914年からアジア太平洋戦争期に至るまで、実質的に南洋群島を統治した。本稿では、1914年から1922年3月までの臨時南洋群島防備隊による統治期間を軍政期、1922年4月以降の南洋庁による統治期間を委任統治期と呼称する。

(3) 千住（2009）。

(4) 千住（2012a）、千住（2012b）、千住（2013）。

(5) 南洋協会については、以下を参照のこと。千住（2012a：131）。

(6) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931）。どの人物がどの箇所を担当したかは不明。クリオンには「ポナペ島」、バラロツクには「パラオ島」、ルーベルには「トラツク島」という肩書きがそれぞれ付されているが、これらは各著者の居住地であると考えられる。『日の光』については、以下を参照のこと。千住（2012a：127）。

(7) 拓務次官堀切善次郎より陸軍次官杉山元宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1931年6月22日（防衛省防衛研究所所蔵『陸軍省大日記昭和六年乙輯第四、五類』）。

(8) 拓務次官堀切善次郎より陸軍次官杉山元宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1931年6月22日に添付の「観光団日程表」（防衛省防衛研究所所蔵『陸軍省大日記昭和六年乙輯第四、五類』）。なお、この日程表には、船便の都合によって予定変更の可能性がある、との但し書きが付されている。

(9)「次官ヨリ拓務次官へ回答」1931年6月26日（防衛省防衛研究所所蔵『陸軍省大日記昭和六年乙輯第四、五類』）。

(10) この日の記述は以下にもとづく。クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：16-17）。以下、出典明記の方法として同様の処理を行う。

(11)「吉本」という人物の詳細は不明であるが、「橋本」という人物に関しては、当時、南洋庁庶務課に所属していた「橋本保」である可能性が高い。日本図書センター（1997：253）。なお、「吉本」という名字は、1928年に実施され

た観光団を引率した人物と同一である。

(12) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：17）。

(13) この「野田」という人物は、当時、南洋庁長官官房に所属していた「野田淳一郎」である可能性が高い。日本図書センター（1997：253）。

(14) 南洋庁東京出張事務所の所在地は、麹町区西日比谷町。

(15)『東京毎日新聞』1931年6月28日付け夕刊2面。『二六新聞』1931年6月28日付け夕刊2面。『報知新聞』1931年6月28日付け夕刊2面。『万朝報』1931年6月28日付け夕刊1面。

(16)『東京朝日新聞』1931年6月28日付け夕刊2面。

(17) 南洋協会（1931：98）。また、1935年に発行された『南洋協会二十年史』に付属の「南洋協会年次誌」には、「昭和六年六月廿七日／南洋群島民内地観光団歓迎午餐会開催」と記録されている。南洋協会（1935：18）。

(18)『東京朝日新聞』によると、その日は15時20分から戸塚球場にて両校による試合が行われており、早稲田大学が15対4で横浜専門学校に勝利している。『東京朝日新聞』1931年6月28日付け3面。

(19) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：17-18）。

(20) このことから、この日の日誌の著者はパラオ居住のバラロツクであると考えられる。

(21) この「友達」については、何らかの理由で内地に滞在している住民であった可能性と、かつて南洋群島に居住していた日本人であった可能性の両方が考えられる。なお、1931年度は、内地の小学校、中等学校、宗教学校、工業徒弟に男性8名女性3名の住民が留学している。南洋群島教育会（1938：358）。

(22) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：18）。

(23) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：18）。

(24) 南洋群島における郵便局設置および住民による貯金については、以下を参照のこと。千住（2013：89）。

(25) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：18-19）。

(26) 東京市立第二中学校では、かつてポナペ支庁長を務めていた「福島」という人物が一行を出迎えている。当該人物は、1925年から1929年までポナペ支庁長を務めていた「福島平」であると考えられるが、東京市立第二中学校とどのような関係にあったかは不明である。日本図書センター（1997：233-249）。

(27) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：19）。

(28) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：19-20）。

(29) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：20）。

(30) この「エラシボン」という人物の詳細は不明である。1918年に実施された観光団にパラオから参加した住民が、観光団の最中に「大腸炎」のため内地で死亡しているが、当該人物の名前は「エラシボン」ではない。「島民観光団ニ

関スル件」1918年7月28日（防衛庁防衛研究所所蔵『大正戦役戦時書類』45）。
(31) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：20）。
(32) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：20-21）。
(33) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：21）。
(34) この「高崎院長」という人物は、1922年から1929年までパラオ病院の院長を務めていた「高崎佐太郎」であると考えられる。日本図書センター（1997：224-249）。
(35) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：21）。
(36) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：21-22）。
(37)『大阪朝日新聞』は、一行の大阪城訪問を写真入りで報道するとともに、その後、一行が大阪朝日新聞社を訪れたことも伝えている。『大阪朝日新聞』1931年7月10日付け9面。
(38)『大阪毎日新聞』は、「南洋から珍客／本社を見学」と一行の大阪毎日新聞社来訪を伝えている。『大阪毎日新聞』1931年7月10日付け9面。
(39) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：22）。
(40) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：22）。
(41) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：23）。
(42) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：23）。
(43) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：23）。
(44) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：23-25）。
(45) 新聞各紙は、一行が7月14日に横浜から出港予定であると報じている。7月10日付け『大阪朝日新聞』でも同様の報道が行われているため、15日の横浜出港はそれ以降に決定した可能性が高い。『大阪朝日新聞』1931年7月10日付け9面。
(46) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：13）。
(47) 当時のトラック支庁長は、高坂喜一。「渡邊」という人物は、当時、ポナペ支庁に所属していた「渡邊重雄」である可能性が高い。日本図書センター（1997：257）。アンガウルの採鉱所の詳細については、以下を参照のこと。南洋庁長官々房（1932：324-330）。
(48) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：13-14）。
(49) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：14-16）。
(50) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：16）。
(51) したがって、6月19日の日誌の著者は、パラオ居住のバラロツク以外であると考えられる。
(52) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：25）。
(53) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：25-26）。
(54) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：25）。
(55) クリオン、バラロツク、ルーベル（1931：26）。

(56)「塚原」という人物は、当時、南洋庁庶務課に所属していた「塚原兼人」である可能性が高い。日本図書センター（1997：257）。その場合、塚原は1925年と1930年に実施された観光団を引率した人物であると考えられる。「安井」という人物の詳細は不明であるが、「安井」という名字は、1927年に実施された観光団を引率した人物と同一である。
(57) 千住（2006：60）。
(58) 南洋庁（1934：472）。
(59)『東京朝日新聞』1931年6月25日付け夕刊2面。
(60)『大阪朝日新聞』1931年7月10日付け9面。
(61)『大阪毎日新聞』1931年7月10日付け9面。
(62)『国民新聞』1931年6月27日付け7面。
(63) 一連の新聞報道を踏まえると、「渡邊」は先述したポナペ支庁所属の「渡邊重雄」である可能性が高いが、「三谷」の詳細は不明である。
(64) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933）。どの人物がどの箇所を担当したかは不明である。ヨヘイ、プリス、ビスマルクには「パラオ島」、ヨハニトウンタランには「ヤップ島」という肩書きがそれぞれ付されているが、これらは各著者の居住地であると考えられる。
(65) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：23-25）。
(66)「杉島」という人物の詳細は不明であるが、「吉本」という名字は、1928年に実施された観光団を引率した人物と同一である。
(67) いくつかの新聞が9日発行の夕刊で観光団の横浜到着を報じているが、なかでも『報知新聞』は、一行の写真を掲載して報道を行っている。『中外商業新報』1932年7月10日付け夕刊2面。『報知新聞』1932年7月10日付け夕刊2面。『読売新聞』1932年7月10日付け夕刊2面。
(68) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：25）。
(69)『都新聞』1932年7月11日付け7面。
(70) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：25）。
(71) 南洋協会（1932：106）。また、1935年に発行された『南洋協会二十年史』に付属の「南洋協会年次誌」には、「昭和七年七月十一日／南洋群島民観光団歓迎茶会開催」と記録されている。南洋協会（1935：18）。
(72) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：25-27）。
(73) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：26-27）。
(74) 公学校については、以下を参照のこと。千住（2013：86）。
(75) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：27）。
(76) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：27-28）。
(77) 南洋興発については、以下を参照のこと。松江（1932）。
(78) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：28）。
(79) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：28）。

(80) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：28-29)。
(81) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：29)。
(82) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：29-30)。
(83) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：30-31)。
(84) この「野田」という人物は、1931年に実施された観光団において、6月27日に南洋庁東京出張事務所にて一行と面会した「野田淳一郎」であると考えられる。
(85) この「高崎」という人物は、1931年に実施された観光団において、7月7日に「京都ノ大学病院」で一行を案内した「高崎佐太郎」であると考えられる。
(86) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：31-32)。
(87) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：32)。
(88) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：32)。
(89) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：32-33)。
(90) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：33)。
(91) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：33-34)。
(92) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：34)。
(93) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：34)。
(94) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：34-35)。
(95) 7月30日は明治天皇の命日である。
(96) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：35-36)。
(97)「稲浪」という人物の詳細は不明であるが、「稲浪」という名字は、1922年に実施された観光団を引率した人物と同一である。
(98) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：18)。
(99) 当時のパラオ支庁長は、伏田彌三郎もしくは向井昌治。日本図書センター (1997：259、261)。
(100) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：18-19)。
(101)「沼田」という人物は、当時、パラオ支庁に所属していた「沼田穀蔵」である可能性が高い。日本図書センター (1997：261)。「三谷」と「前澤」という人物の詳細は不明であるが、「三谷」という名字は、1931年に実施された観光団を引率した人物と同一である。
(102) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：19)。
(103) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：19-20)。
(104) 当時のヤップ支庁長は、中橋秀一もしくは高木勇松。日本図書センター (1997：257、261)。
(105) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：20)。
(106) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933：20)。
(107) 7月1日の「しせいきねんび」とは「始政記念日」のことであり、委任統治期に先立つ軍政期に由来する。すなわち、1918年7月1日に臨時南洋群島防

備隊が軍政から民政に移行したことを記念し、1918年以降、7月1日を「始政記念日」とすることとなった。南洋庁長官々房（1932：1-2）。

(108) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：20-21）。

(109) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：21-22）。

(110) 当時のサイパン支庁長は、伏田彌三郎。日本図書センター（1997：261）。

(111) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：22）。

(112) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：22-23）。

(113) よって、6月26日から29日までの第11回日誌の著者は、パラオ居住のヨヘイ、プリス、ビスマルクのいずれかであると考えられる。

(114) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：36-37）。

(115) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：37）。

(116)「ちつこう」が「築港」であるとするならば、サイパンでは1926年度から1932年3月にかけてサイパン港の築港工事が行われているとともに、1932年度からは埠頭の新設工事が実施されている。南洋庁長官々房（1932：437-438）。また、コーヒー栽培に関しては、サイパンが南洋群島における先進地域であるとともに、南洋庁は1927年度以降、コーヒー栽培者に対して奨励金を付与している。南洋庁長官々房（1932：285-286）。

(117) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：37）。

(118) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：37）。

(119) これら3名は、いずれも当時サイパン支庁に所属していた「羽山吉蔵」、「永井卯吉」、「峠二郎」である可能性が高い。日本図書センター（1997：261）。

(120) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：38）。

(121) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：38）。

(122) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：38）。

(123) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：38-39）。

(124) パラオ支庁内からの参加者がどのアバイを見学したか不明であるが、『南洋庁施政十年史』には次のような記述が見られる。「ヤップ島にあるもの殊に巨大、かつ有名で、大正十四年の暴風に逢ひ、一度は破壊されたが、其の後また再築を見た」。南洋庁長官々房（1932：464）。

(125) 当時のヤップ支庁長は、高木勇松。日本図書センター（1997：261）。

(126) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：39）。

(127)「塚原」と「藤田」は、当時パラオ支庁に所属していた「塚原兼人」と「藤田早苗」である可能性が高い。日本図書センター（1997：261）。その場合、塚原は1925年と1930年に実施された観光団を引率した人物であると考えられる。「安井」という人物の詳細は不明であるが、「安井」という名字は、1927年に実施された観光団を引率した人物と同一である。

(128) ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933：39）。

(129) 当時のパラオ支庁長は、向井昌治。日本図書センター（1997：261）。

(130) 第11回日誌の一連の記述から、8月10日から13日までの第11回日誌の著者は、パラオ居住のヨヘイ、プリス、ビスマルクのいずれかであると考えられる。
(131) 千住 (2006：60)。
(132) 南洋庁 (1934：472)。
(133)『中外商業新報』1932年7月10日付け夕刊2面。
(134)『報知新聞』1932年7月10日付け夕刊2面。
(135)『読売新聞』1932年7月10日付け夕刊2面。
(136)『都新聞』1932年7月10日付け13面。
(137)『報知新聞』には、「酋長の娘ならぬ土人の娘が一人も居ないのがさびしい」とある。『報知新聞』1932年7月10日付け夕刊2面。
(138) 第12回に関しては、これまでの観光団で見られた参加者による日誌が『日の光』に掲載されていないが、その理由は不明である。
(139) 南洋庁長官官房文書課 (1936：174)。
(140) その様子については、翌日付けで発行された『東京朝日新聞』で確認することができる。そこには、内地で見たいものについて聞かれたある(ママ)参加者が、「世界で一番強い日本の陸軍がみたいものです、軍艦は島でも時時見ますが、陸軍の方は勇ましいことを話で聞いてゐるだけですから」とこたえたとあるほか、内地で買いたいものという問いに対して、ギター、マンドリン、ガラス器、鏡、自転車のほかに、小舟用の発動機や製材機械を挙げたことが記されている。また、参加者は「平均千円以上の小遣銭を持つて来てゐるさうである」との報道も看取される。『東京朝日新聞』1933年7月19日付け7面。
(141)『東京朝日新聞』1933年7月20日付け11面。
(142)『万朝報』1933年7月20日付け3面。
(143) 当時の東京市長は、牛塚虎太郎。
(144)『国民新聞』1933年7月20日付け3面。
(145)『国民新聞』1933年7月22日付け夕刊2面。
(146)『京都日出新聞』1933年7月27日付け3面。なお、同紙によると、日吉屋の所在地は「御池河原町東入る」。
(147)『京都日出新聞』1933年7月29日付け夕刊3面。
(148)『大阪朝日新聞：京都版』1933年7月29日付けB-5面。
(149)『京都日日新聞』1933年7月29日付け3面。
(150)『大阪毎日新聞』1933年7月30日付け5面。なお、当該紙は、「連盟脱退、委任統治問題のあととて、至るところで内地の親しみ深い歓迎をうけた」とも伝えている。
(151) 千住 (2006：60)。
(152) 南洋庁 (1934：472)。
(153)『都新聞』1933年7月19日付け12面。

(154)「片桐」という人物は、当時、南洋庁長官官房に所属していた「片桐栄一郎」である可能性が高く、「田代」という人物は、当時、南洋庁通信課に所属していた「田代世紀二郎」である可能性が高い。日本図書センター(1997:265)。「安井」という人物の詳細は不明であるが、「安井」という名字は、1927年に実施された観光団を引率した人物と同一である。

(155) 3回の観光団における個別訪問先に関する考察は、委任統治期に実施されたすべての観光団の詳細が明らかになった後に、まとめて行いたい。

参考文献

クリオン、バラロツク、ルーベル1931「第十回観光団日誌」(『日の光』10：13-26)。

千住一　2006「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」(『立教大学観光学部紀要』8：59-64)。

千住一　2009「植民地統治と「観光」政策：日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」(寺前秀一編『観光学全集第9巻：観光政策論」原書房：227-259)。

千住一　2012a「委任統治期南洋群島における内地観光団（1922-1924年)」(『奈良県立大学研究季報』22 (4)：123-136)。

千住一　2012b「委任統治期南洋群島における内地観光団（1925-1927年)」(『奈良県立大学研究季報』23 (1)：57-73)。

千住一　2013「委任統治期南洋群島における内地観光団（1928-1930年)」(『奈良県立大学研究季報』24 (1)：59-94)。

南洋協会　1931「南洋群島民内地観光団歓迎」(『南洋協会雑誌』17 (8)：98)。

南洋協会　1932「南洋群島民観光団歓迎茶話会開催」(『南洋協会雑誌』18 (8)：106)。

南洋協会　1935「南洋協会年次誌」(南洋協会『南洋協会二十年史』南洋協会)。

南洋群島教育会　1938『南洋群島教育史』南洋群島教育会。

南洋庁　1934『第二回南洋庁統計年鑑』南洋庁。

南洋庁長官々房　1932『南洋庁施政十年史』南洋庁長官々官房。

南洋庁長官官房文書課　1936『第四回南洋庁統計年鑑』南洋庁長官官房文書課。

日本図書センター　1997『旧植民地人事総覧：樺太・南洋群島編』日本図書センター。

松江春次　1932『南洋開拓拾年誌』南洋興発株式会社。

ヨヘイ、ブリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン1933「第十一回観光団日誌」(『日の光』11：18-39)。

表1　第10回内地観光団（1931年）の予定

日数	月/日	曜日	「観　光　地」
1	6/26	金	横浜着、上京、健康診断（宿所麹町区平河町四ノ八 繁星館）
2	6/27	土	宮城遙拝、南洋庁出張事務所、拓務省、市役所訪問、丸ビル
3	6/28	日	休養（希望者ハ教会へ）、午後日比谷公園、松屋呉服店
4	6/29	月	近衛歩兵連隊、淀橋専売局、明治神宮参拝
5	6/30	火	貯金局、銀座通、三越
6	7/1	水	小学校、中学校、女学校
7	7/2	木	上野動物園、松坂屋、浅草見物
8	7/3	金	燐酸肥料工場、石鹸工場
9	7/4	土	買物、退京準備
10	7/5	日	東京発、京都着（三等特急）
11	7/6	月	御所、東本願寺、京極夜景
12	7/7	火	山ケーブルカー、インクライン、商品陳列所
13	7/8	水	京都発、大阪着、午後市役所
14	7/9	木	造幣局、大阪城、毎日朝日両新聞社
15	7/10	金	適当ナル紡績工場、硝子工場、道頓堀、千日前
16	7/11	土	宝塚遊園地
17	7/12	日	大阪発、横浜着（三等特急）
18	7/13	月	横須賀工場、追浜飛行場、午後出発準備
19	7/14	火	出帆

出典）
拓務次官堀切善次郎より陸軍次官杉山元宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1931年6月22日に添付の「観光団日程表」（防衛省防衛研究所所蔵『陸軍省大日記昭和六年乙輯第四、五類』）。

注）
「観光地」という文言は出典のママ。

表2　第10回内地観光団（1931年）の行程

日数	月/日	曜日	実　　施
1	6/26	金	横浜に到着、東京へ移動
2	6/27	土	宮城、南洋庁東京出張事務所、拓務省、東京市役所、丸ビル、丸の内中央亭本店にて南洋協会主催の会食、日本郵船
3	6/28	日	教会、キリスト大学校、日本青年館
4	6/29	月	歩兵第二連隊、南洋貿易、淀橋専売局、明治神宮
5	6/30	火	貯金局、日比谷公園、松本楼、松屋、三越
6	7/1	水	東京市立第二高等女学校、千代田小学校、東京市立第二中学校、上野精養軒、動物園
7	7/2	木	上野松坂屋、浅草、花屋敷、帝国館
8	7/3	金	南海商事会社、大日本合同油脂グリセリン会社王子工場、花王石鹸工場、オリエントカフエー、浅草
9	7/4	土	浅草、墓参り
10	7/5	日	二重橋、東京を出発、京都に到着
11	7/6	月	京都市役所、ヤオマサ、寺
12	7/7	火	比叡山、大学病院
13	7/8	水	伏見稲荷、本願寺、物産陳列所、京都を出発、大阪に到着、文楽座
14	7/9	木	造幣局、大阪城、公会堂、日本アルミニユーム製造所、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞社
15	7/10	金	鐘淵紡績会社、島田硝子製造所、角座
16	7/11	土	宝塚
17	7/12	日	大阪を出発、横浜に到着
18	7/13	月	市内見物
19	7/14	火	横須賀鎮守府
20	7/15	水	横浜を出発

出典）

クリオン、バラロツク、ルーベル（1931）、南洋協会（1931）にもとづき、筆者作成。

注）

6/27：日本郵船の後、一部の参加者が野球を観戦している。

6/28：教会については、参加者が天主公教会と霊南坂教会に分かれて訪問している。

7/11：一部の参加者が宝塚に居残って、活動写真を観覧している。

表3　第11回内地観光団（1932年）の行程

日数	月/日	曜日	実　　施
1	7/9	土	横浜に到着、東京へ移動、宮城、健康診断
2	7/10	日	休養、〔天主公教会、三越、銀座〕
3	7/11	月	南洋庁東京出張事務所、拓務省、日比谷公園、拓務大臣官邸、東京市役所、日本郵船、丸ビル精養軒にて南洋協会主催の会食
4	7/12	火	靖国神社、近衛歩兵第二連隊、たいしようかくにて南洋貿易主催の会食、専売局、帝都座
5	7/13	水	泰明小学校、三越、ふく井ろうにて南洋しよくさん公し主催の会食
6	7/14	木	高等女学校、浅草、花屋敷
7	7/15	金	明治神宮、代々木練兵所、白木屋、東京でんとうビルデングにて南洋興発主催の会食
8	7/16	土	農事試験場、大日本人造肥料製造会社、合同油脂グリセリン製造会社、白木屋
9	7/17	日	休養、明治神宮外苑
10	7/18	月	第二市立中学校、上野動物園、上野公園、松坂屋、銀座夜景
11	7/19	火	とも田養鶏場、東京製鋼会社、東京電気会社、マツダ照明学校、明治製菓
12	7/20	水	貯金局、放送局
13	7/21	木	東京を出発、京都に到着、健康診断
14	7/22	金	京都市役所、比叡山、延暦寺、日吉神社、つるき、京極夜景
15	7/23	土	東本願寺、京都御所、やお正にて京都市役所主催の会食、市内見物
16	7/24	日	祇園祭、京都を出発、大阪に到着
17	7/25	月	大阪市役所、大阪城、公会堂にて大阪市役所主催の会食、市内見物、天神祭
18	7/26	火	造幣局、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
19	7/27	水	鐘淵紡績会社、島田がらす工場、中本貝ぼたん工場
20	7/28	木	宝塚
21	7/29	金	大阪を出発、横浜に到着
22	7/30	土	横須賀鎮守府
23	7/31	日	横浜を出発

出典)
ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン（1933)、南洋協会（1932)、各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注)
〔　〕内の記述は、新聞報道にもとづく。
7/20：放送局の後、一部の参加者が南洋庁東京出張事務所を訪れている。

表4　第12回内地観光団（1933年）の行程

日数	月／日	曜日	実　施	予　定
1	7/18	火	横浜に到着、東京へ移動、銀座、赤坂	
2	7/19	水	霞ヶ関にて拓務大臣主催による会食、東京市役所、日比谷公園	
3	7/20	木		
4	7/21	金	靖国神社、近衛歩兵第二連隊	
5	7/22	土		
6	7/23	日		
7	7/24	月		
8	7/25	火		
9	7/26	水	東京を出発、京都に到着	
10	7/27	木	京都座	京都市役所、京都市長主催による会食、京都御所、東本願寺
11	7/28	金	比叡山、松竹下加茂撮影所	京極
12	7/29	土	京都を出発、大阪に到着、大阪毎日新聞社	
13	7/30	日		
14	7/31	月		
15	8/1	火		
16	8/2	水		大阪を出発、横浜に到着
17	8/3	木		
18	8/4	金		横浜を出発

出典）
各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注）
空欄は、出典史料に記述がないことを意味する。
実際の内地出発日は、8月6日であったと考えられる。